

怨霊の神格化

—— 和霊信仰を事例に ——

劉 建 華

はじめに

人の神格化は最も早くから関心を寄せられてきた問題のひとつであり、柳田國男（1926）の「人を神に祀る風習」がその研究の嚆矢だと言える。柳田は「遺念余執といふものが、死後に於いてもなほ想像せられ、従って屢々タタリと稱する方式をもって、怒や喜の強い情を表示し得た人」の神格化〔柳田 1926：475〕を取り上げ、又「その根幹に非業の死を遂げた人の怨霊の災いを鎮めようとする御霊信仰がある」〔同上：478〕と論じている。柳田國男の論によれば、人を神に祀る習俗の本来的な形式は「非業の死者」の祟りを鎮めるための神格化であり、いわゆる「祟り神起源説」である。中世から近世にかけて、非業の死を遂げた人物は怨霊の形で社会全体に天変地異をもたらした。これらの怨霊の祟りを鎮めるため、神社を創建しその人物を神として祀ることも行われた。しかし、当該人物が神に祀られた後、時代の経過につれて、怨霊が次第に忘却され、靈験あたらかな神として信仰されてきた傾向が見られる。本稿は歴史的な視点で、その神格化の発生と信仰の維持の両面を考察する上で、怨霊の神格化を再検討したい。そこで、本稿では、菅原道真の神格化を踏まえつつ、和霊信仰を事例に、怨霊の神格化を詳細に考察していきたい。

1 怨霊と菅原道真

1-1 怨霊とは何か

山田雄司によれば、怨霊とは死後に落ち着くところのない靈魂である。古来、日本では怨霊が憑依することによって、個人的な祟りにとどまらず、疫病や天変地異など社会に甚大な被害をもたらされると信じられてきた〔山田 2014：1〕。

柳田國男はこういう怨霊の活動によって疫病が流行するとて怖れられた信仰形態を御霊信仰と定義している。柳田によれば、都市的生活が進んでくると、集団生活のために思いがけぬ災厄が発生するようになるが、これを怨霊の活動に帰して考える傾向があった。ことに奈良時代の末から平安時代にかけて貴族の対立抗争のために失脚した権力者の靈魂が祟るのでであると信ぜられた〔柳田 1984：218〕。

表1が示すように、平安時代から多くの怨霊が登場した。怨霊となったことを明確に示す人物は奈良時代に藤原氏によって非業の死を遂げていった長屋王（684?～729）であると言われている。さらに、史上では菅原道真、平将門、崇徳院は日本三大怨霊と称されている。この中で菅原道真の怨霊が最も知られている。

表1 歴史上の有名な怨霊の概況
 (『跋扈する怨霊—祟りと鎮魂の日本史』に基づいて、筆者作表)

怨霊とされた人	年代	怨霊になった理由	具体的な祟り	鎮魂対策
長屋王	8世紀前半	聖武天皇への謀反の嫌疑をかけられて一族滅亡	謀反をでっち上げた藤原四兄弟の死	
淳仁天皇	8世紀中期	称徳上皇の道鏡への信任に異議をとこなえたため、怒りを買って流罪となった	早魃、暴風雨、飢饉を引き起こした	明治時代になってから創建された白峰神宮に祀られた
早良親王	8世紀後半	長岡京造宮の責任者藤原種継が殺され嫌疑を受け、憤死	疫病の流行、長岡京の洪水、桓武天皇の親族の連続死等	平安京への遷都 神泉苑御霊会
菅原道真	10世紀初	醍醐天皇への謀反の嫌疑をかけられ、左遷された	関係者の不審な死、疫病、落雷などを起こした	天満宮に祀られた
平将門	10世紀中期	天皇に引引く逆賊とされ非業の死を遂げ、晒し首にされた	平将門の祟りとされる疫病が流行した	首塚建立、神田明神に祀られた
崇徳上皇	12世紀中期	朝廷への憎しみ	王家の没落(平治の乱、承久の変)	明治時代になって神社創建

1-2 菅原道真の生涯とその死

菅原道真(845-903)は平安時代中期の廷臣で漢学者、文人である。菅原は善の子であり、代々学者の家柄であった。文章博士となった後讃岐守となった。宇多天皇に信頼され、藤原氏を押さえるため、藤原基経の死後、蔵人頭に抜擢された。醍醐天皇在位中の899年に、藤原時平が左大臣になった時に道真も右大臣に任ぜられ、学者として異例の出世であった。しかし、宇多天皇から厚い信頼を受けた道真と新帝・醍醐天皇との関係は微妙であった。901(昌泰4)年正月に時平と道真がともに従二位に叙されたのちの25日に、道真は突然太宰権帥に左遷されることになった。左遷の理由は政敵の藤原時平の讒訴であったと言われている。そして大宰府浄妙院で謹慎すること2年、天皇の厚恩を慕い望郷の思いにかられつつ、903(延喜3)年2月25日に配所で没し、失意のうちにその地で生涯を閉じた。福岡県太宰府市安楽寺に葬られている。

道真の死後、京では怪異事件が相次いで起こった。無実の罪を晴らすことも出来ないまま太宰府において死んだ道真の怨霊が、彼を貶しめた政敵に祟り、一連の天地異変を起こしたと噂されていた。『北野縁起』によると、その怨霊は道真の死の直後から始まっていたという。まず、醍醐天皇の周辺では、異変が相次いでいた。道真を追い落とした首謀者たちに災禍が降りてきた。道真が亡くなった5年後の908(延喜8)年には、藤原菅根が変死した。そして、道真公配流の張本人の藤原時平が三十九歳の働き盛りで死去したのは道真が死んだ6年後の909(延喜9)年のことであった。これらは怨霊の復讐だと噂されていた。『扶桑略記』によると、藤原時平は急病にかかり床に伏せ、三善清行の子である僧の浄蔵貴所が菅原道真の怨霊を取り除く加持祈禱を行う時に、藤原時平の耳から龍の姿をした菅原道真の怨霊が出てきて、加持祈禱を止めさせるに迫ったという。その中には「菅丞相の霊、白昼顕形す。左右の耳より青龍出現す」と書かれており、のちに藤原時平の病態が急変して亡くなった。時平の命を奪った道真の霊は、その後ますます激しさを加え、時平の子孫たちを次々と死に追いやり、遂に、醍醐天皇の皇太子の命まで奪うに至った。『日本紀略』延喜二十三年(923年)三月二十一日条において、この日皇太子保明親王が二十一歳の若さで死去したのは、「菅帥の霊魂宿忿」の仕業と世間において噂しているとある。具体的には「皇太子保明親王薨ず。天下庶人悲泣せざるはなし。その声雷のごとし。世挙げて云

く、菅帥靈魂宿忿のなすところなり」と記されている。

醍醐天皇は道真の怨霊に畏怖し、道真の宿忿を慰撫するため色々方策を考えた。まず、醍醐天皇は詔して、道真の官を元の右大臣に戻し、正二位を追贈し、併せて道真を左遷した昌泰4年・延喜元年正月の詔を破棄した。また閏四月には長雨と疾疫鎮圧のため年号を延長と改められ、大赦の令が発せられた。それにしても、道真の祟りは治らず、災厄は続出していた。925（延長3）年の春から天然痘が流行し、皇太孫の慶頼王が僅か五歳で亡くなった。保明親王の御息所は時平の娘の仁善子で、慶頼王はその所生の皇子なので、道真の怨霊は時平の子孫や縁故者、更には醍醐天皇にも祟ったと言われている。そして930（延長8）年6月26日、旱天が続くので諸卿が殿上に侍して請雨の件で会議していたところ、俄に雷鳴し、清涼殿西南の第一柱に落雷した。大納言藤原清貫と右中弁平希世等が震死し、紫宸殿にいた右兵衛佐美努忠包等が髪を焼かれるなどして死亡した。醍醐天皇はこの事件に激しい衝撃を受けて病床に着き、咳病を患って病勢を募らせてしまわれた。死期を悟られた天皇は寛明親王（朱雀天皇）に譲位し、左大臣の忠平（道真の弟）に摂政のことを依託し、四十六歳を以て崩じた。

道真を追い落とした藤原時平や醍醐天皇、その縁者が次々と急死しただけではなく、社会全体にも一連の異変が起きた。京の洪水、旱魃、雷、伝染病の流行など、これらの禍いはすべて道真の祟りの仕業だと噂されていた。『日本紀略』の記録によると、910（延喜10）年と911年には洪水により、多くの町家が破損した。912年と914年には、洛中では大火が起こった。915年には疱瘡病が流行した。917年には渇水があり、翌年にはまた洪水が発生した。922（延喜22）年には、咳病が大流行していた。

1-3 菅原道真の神格化と天神信仰の成立

上記、道真の死後、一連の天変地異が起きて、特に清涼殿の落雷事件で、道真の怨霊が雷を操ったと云われるようになり、道真が雷神になったという伝説が流布するようにもなった。やがて菅原道真の神格化が始まった。奈良末・平安初頭以来、朝廷上層部における政争は多くの失脚者を生み出した。それらの人の怨霊は道真の場合と同様に、一連の災厄をもたらした。失脚者等の怨霊は御霊と呼ばれ、祀られていた。御霊は政争の当事者に祟るだけでなく、天変地異を起こし、流行病の元として社会的な畏怖の対象ともなった。生前に高い地位にあり、この世に残した怨みが大きい程、御霊として猛烈な力を発揮すると信じられ、それを慰撫する祭りが御霊会名で民間に誕生した。863（貞観5）年5月、平安京の神泉苑においては、御霊会が初めて行われた。道真の怨霊も全く同じ手順で御霊となり、雷神を駆使し、強烈な託宣を下す神として古くから雷神を祀った由緒のある北野に祀られるようになった。創建されたのは現在の北野天満宮である。北野天満宮の由緒によると、北野天満宮は天神信仰の発祥地であり、菅原道真を祭神とする全国約1万2000社の天満宮、天神社の総本社である。北野天満宮の創建は、平安時代中頃の947（天曆元年）に、西ノ京に住んでいた多治比文子や近江国（滋賀県）比良宮の神主神良種、北野朝日寺の僧最珍らが当所に神殿を建て、菅原道真を祀ったのが始まりとされる。その後、藤原氏により大規

模な社殿の造営があり、987（永延元）年に一條天皇の勅使が派遣され、国家の平安が祈念された。この時から「北野天満天神」の神号が認められ、1004（寛弘元）年の一條天皇の行幸をはじめ、代々皇室の崇敬をうけ、国家国民を守護する靈験あらたかな神として崇められてきたという。このように、北野天満宮創建をはじめ、後の天皇からの追贈位や御幸等、道真の怨霊を鎮めようとするとともに、天神信仰と発展してきた。その後、時の経過とともに道真の怨霊が次第に鎮まり、怨霊から善神へと発展していった。道真は生前が優れた学者・詩人であったことから、後世には「学問の神」として知られるようになったとされている。北野天満宮の由緒によると、江戸時代には、各地に読み書き算盤を教える寺子屋が普及し、その教室に天神が祀られ、道真の姿を描いた「神影」が掲げられて、学業成就や武芸上達が祈られてきた。のちに、道真は「学問の神さま」、「芸能の神さま」として広く知られるようになった。菅原道真すなわち「天満大自在天神」の神徳は、おもに学業と五穀豊穡であるが、その他にも多岐にわたる神徳があるとされる。北野天満宮のホームページによれば、その神徳には「五穀豊穡・商売繁盛」「正直・至誠の神」「冤罪を晴らす神」「学問・和歌・連歌の神」「厄除の神」などがあるという。これらの神徳の中で、学問や受験にご利益を授けることが最も有名である。年明けになると、多くの受験生やその家族が各地の天満宮を訪れており、境内に合格祈願の絵馬が夥しくかけられている光景もよく見かけられる。

2 山家清兵衛と和霊信仰

2-1 和霊信仰とは

和霊信仰とは四国宇和島の和霊神社への信仰である。祭神の宇和島藩士山家清兵衛は宇和島騒動の際蚊帳の中で横死したと言われ、その後起きた天変地異の因は、すべて彼の祟りとみなされた。その霊を鎮めるため、彼を神として神社に祀り上げた。このように、和霊信仰が御霊信仰として成立した。

2-2 山家清兵衛と宇和島騒動（山家事件）

宇和島藩では山家事件に関する書類はほとんど残されていない。本家仙台藩に残る史料から藩主の密令による暗殺説がほぼ明らかになっている。

仙台藩側の『東藩史稿』巻之6によれば、山家公頼（通称山家清兵衛）は最上義光の家臣であり、保春院夫人（義姫）が輝宗に嫁入りする時、義姫に従って伊達氏に来て仕えることとなった。1614（慶長19）年二代将軍秀忠の命令により、伊達政宗の側室飯坂氏の間にも生まれた庶長子秀宗が伊予宇和島に封ぜられた際、政宗は公頼を選んで秀宗の御守役として差添えられた。政宗の庶長子秀宗が、伊予国宇和郡十萬石の領主になる時、清兵衛は民政、財政担当の総奉行に抜擢され、若い秀宗を補佐した。

清兵衛は仙台藩や江戸幕府との関係調節に苦慮し、仙台の政宗に宇和島藩10萬石の内、3萬石を隠居料として割くことで宗家からの借財返済を繰り延べたり、幕府の大坂城石垣修復事業に参

加したりした。こうした行為が秀宗や桜田玄蕃ら他の重臣らとの対立を招いた。また公頼自身、政宗が秀宗を監視するために送った目付を兼ねており、浪費の改まらない秀宗の行状を政宗に報告し、政宗が秀宗を諫める書状を出しているほどであった。1620（元和6）年1月の大坂城石垣普請工事で共に奉行を務めた桜田玄蕃が不正をしたと秀宗に讒訴したため、公頼は帰国して秀宗に弁明し、謹慎した。これは工事の進捗状況の報告で公頼と桜田の報告に齟齬があり、公頼が正当だったので面目を失った桜田が讒訴に及んだとされる。同年6月29日、秀宗の命を受けた桜田一派の家臣達が山家邸を襲撃、翌未明に公頼らは討ち取られた。享年42歳である。山家事件に関する明確な史料は見られないが、仙台藩の『伊達治家記録』などには多少の記録が残されている。

『台徳院殿〔徳川秀忠〕御実紀〕巻52には、元和六年の大坂城修築の件について記録がある。此の年はちょうど山家清兵衛が殺された年である。

元和六年庚申〔かのえさる〕……○十八日大坂城修築の事を。西北国諸大名に課せらる。……玉造口より大手門迄は松平薩摩守家久。……伊達兵五郎秀宗〔ほか53大名〕……内郭東は…南は…西は…伊達兵五郎秀宗〔ほか70大名〕……

『伊達治家記録 三』元和六年十月朔日の政宗御書判においては、清兵衛の祟りに関する記録も見られる。

此後豫州へ御使者ヲ以テ右ノ義共仰立ラレ、侍従殿ヲ御勘当アリ、三年御不通ト云云。侍従殿山家ヲ死罪ニ処セラル事、無実ノ讒訴ニ因ルト云フ、後ニ山家怨霊種々ノ祟リヲナシ、奇怪最モ多シ、因テ遂ニ霊社ヲ宥メラル、山頼明神ト号スト云云

また、後世において多くの伝承を拾い集めた鈴木讓の『和霊神社祭神事績』に描かれている悲惨な最期が通説となっている。

黒頭巾ヲ以テ面ヲ覆ヒタル者数人（中略）宅ニ忍入り 椽ヨリ飛上リテ、直チニ蚊帳四方ノ緒ヲ切断シテ呼テ曰ク、藩中ノ請ニ依テ、命ヲ蒙リ討ツト、祭神忽チ枕頭ノ刀ヲ把ルモ、麻制ノ蚊帳ニ包マシ、カノ室ヲ脱スル得ズ（中略）刺客遂ニ刺シテ祭神ヲ殺ス、祭神時二年四十二

2-3 山家の怨霊と和霊信仰の成立

山家清兵衛の死後から和霊神社が創建されるまでの年表（表2、参照）を見ると、清兵衛の死後、一連の天変地異が続出していたことがわかる。これらの一連の異変は清兵衛の祟りの仕業だと考えられていた。表2に示すように、桜田玄蕃をはじめとする政敵の惨死も続出し、地震、早魃や大風雨などの災害も頻発していた。まず、1632（寛永9）年、宇和島藩伊達家の菩提寺である正眼院（現、大隆寺）で行われた藩主秀宗夫人桂林院殿の三回忌法事において、大風で本堂の梁が落ち、桜田玄蕃が圧死したという。大坂城修築問題で清兵衛との対立や清兵衛暗殺事件に深く関わったことなどで、桜田の死は山家の怨霊の祟りと噂されていた。その後、1637（寛永14）年には藩主秀宗は中風で病床に臥すことが多くなった。1644（寛永21）年、秀宗の長男である宗実が父に先立ち三十三歳で病死した。また、1645（正保2）年には、宇和島藩の江戸藩邸では落

雷が発生し、大立目左太郎が死亡した。1650（慶安3）年、同じく江戸の藩邸では落雷が起きて、三浦甚太夫と服部庄太夫二人が下人と共に絶死した。1653（承応2）年秀宗の次男で後継ぎ候補者の宗時も父に先立ち39歳で早世した。これだけではなく、更に、1649（寛安2）年の大地震や1663（寛文3）年の大早魃、1666（寛文6）年の大風雨など、多様な自然災害も相次いで発生した。政敵桜田の惨死や藩主の長男と次男の早世、自然災害の多発など、これらの一連の不幸は清兵衛の怨霊の祟りと見なされていた。その結果、山家の霊を慰めるために、その霊を社に斎き祀った。『鶴鳴餘韻』の記録によれば、1631（寛永8）年城北森安の八面大荒神に小社を営み、児玉明神として山家を祀りあげたという。その後、1653（承応2）年の6月24日には、藩主秀宗は京都奉幣使を迎えて盛大な祭典を行い、檜皮社に山頼和霊神社を建立した。この年はちょうど山家清兵衛が死後33年で、三十三回忌を経て、ホトケから祖霊になることが観念されていた。その後、和霊神社が創建されてからも、大早魃や大風雨などの災害が止まらず、1667（寛文七）年には再び森安の八面大荒神の下に置くようになった。また、山家清兵衛の霊を祀ることについては、1711（宝永7）年に成立した『予陽郡郷俚諺集』（地誌）の記録には、「其霊静まらず、無実の罪怨憤深く祟りをなす、仍って其霊を鎮んが為に一社に祭り給ふ」とある。つまり、非業の死を遂げた山家の祟りを鎮めるために彼を神社に祀りあげた。ここでは、山家清兵衛を神社に祀ることは怨霊・御霊信仰に基づいて成立したことが確認できる。上記のように、山家清兵衛は冤罪で亡くなり、死後に一連の天変地異を起こしたことは道真と酷似している。

最初の森安にあった小祠については、当時の領民は、その凶変を悲しみ、密かに城北森安八面荒神境内に小さな祠を建て、山家を祀ったという説もある。それにしても、山家の祟りが納まらず、一連の天災地異が絶えずに起きて、特に藩主家の長男・次男の早世で、山家清兵衛の祟りを恐れた藩主も遂に山家の怨霊を鎮めるために和霊神社を造営した。二代藩主伊達宗利の時、社前の田を道に改修し、社域拡張を行った。三代藩主伊達宗相は石灯籠、神輿三体を寄進した。四代藩主伊達村年の代、吉田家から「大明神」の号が授与され、村年は笠鉾車と御紋付提燈二張を寄進した。このように、歴代藩主の保護と尊崇により、和霊信仰も大いに発展した。特に、四代藩主村年の代に「大明神」号が授けられてから、災害などの異変はほとんど見られなくなった。それにともない、和霊の性格も変化し、信仰圏も広がっていった。

表2 山家清兵衛年表（『愛媛県史 近世上』に基づいて 筆者作表）

年号（西暦）	事項	災害
元和元年（1615）	秀宗、宇和島郡入城	
元和6年（1620）	山家清兵衛没	
寛永8年（1631）	森安の八面大荒神に小社を建て、児玉明神として祭祀	
寛永9年（1632）	桜田玄藩横死	
寛永14年（1637）	藩主秀宗中風 病床に臥すこと多かった	
寛永21年（1644）	秀宗長男宗実33歳で病死	
正保2年（1645）	江戸御屋敷江大立目左衛門雷死	落雷
慶安2年（1649）		大地震
同3年（1650）	江戸御上屋敷江雷落し、三浦甚太夫、服部庄太夫兩人、下人共ニ絶死	落雷

承応2年(1653)	秀宗次男宗時39歳で早世	
同年(1653)	藩主秀宗、檜皮の森に和霊神社造営	
寛文3年(1663)		大旱魃
同6年(1666)		大風雨損多し
同7年(1667)	森安に遷宮	
延宝4年(1676)		大風雨、損多し
元禄2年(1689)		洪水、田畑損
元禄9年(1696)	社地拡張	大風雨
元禄15年(1702)	伊達宗相ら神輿三体寄進、祭礼開始	大風雨の被害、物成3万石損
宝永3年(1707)	和霊江御代参	
正徳元年(1711)	疱瘡病流行、和霊に祈祷	疱瘡病流行
享保5年(1720)	和霊社人より大明神号 申出	
享保6～8年(1721～1723)		大凶作、毎年1～3万石損
享保13年(1728)	吉田家から明神号、大明神となる	
享保14年(1729)		虫害、洪水
享保20年(1735)	鎌江城趾に遷宮	
元文3年(1738)	和霊祭礼、和霊に五穀豊穰祈祷	
延享3年(1746)	和霊祭礼市町之節、運上銀差御赦免	
寛延元年(1748)	町内より神馬奉納	
寛延2年(1750)	和霊祭旅人入船、入船高四百六十艘旅船十九艘、旅人式千五百人程	
宝暦8年(1758)	和霊神事他所参詣且入船申出ル。向新町宿付候、大洲、松山、讃州、土州、参詣式百七十六人、商人十五人。新町口見及候分、土州七百五十八人程、大洲二百人程、松山六十人程……	

3 和霊信仰の拡大と変容

1728(享保13)年、吉田家から「大明神」の神号が受容され、それ以来宇和島藩では災害はほぼなくなった。そこで、清兵衛の霊が和らげられ、その祟りが鎮まるようになったと推定できる。宮田登によれば、「明神・霊神号は、吉田家が附与するものであり、神格の上では霊神→明神と昇格するのが通例である。人間神に神号が与えられることは、祟りという思惟構造が、恵みを与える、つまり民衆の欲求に応じた霊能を示すという観念にとって代わる、つまり、祟りの克服という過程を明示する指標と考えられる」[宮田 1964:189]という。和霊の霊能としては、例えば、1711(正徳2)年、宇和島藩では疱瘡病が流行し、和霊に祈祷したという記録がある。ここで、「和霊様」が祈願の対象とされ、病氣平癒・疫病退散などの霊能があると想定できる。また、同時期に成立して江戸時代の百科事典と呼ばれる『和漢三才図会』においては、「…祟ニ若宮明神、為ニ当処氏神 於是神怒徐和 却国家守護靈験甚多…」と書かれている。つまり、非業の死を遂げた山家清兵衛の祟りが次第になくなり、そのかわりに守護神としての霊験が多く現れたと言える。その後の1738(元文3)年には、和霊神祭礼において五穀豊穰の祈祷が行われた。ここでは、和霊が農業の神様としての性格も窺われる。『記録書抜伊達家御歴代事記』の記録からみれば、和霊社が造営されてから、病氣平癒、疫病退散、五穀豊饒など多様な祈祷が行われた。1711(正徳元)年に疱瘡流行で祈祷が行われ、1730(享保15)年に不作、不猟で祈祷が行われ、1738(元文3)年に五穀豊饒祈祷が行われた。さらに、1784(天明4)年に疫病流行で祈祷が行われ、1790(寛政2)年に藩主村候の病氣回復祈祷が行われた。言い換えれば、和霊には多様な霊験が現れたと考えられる。ここでは、「和霊」が怨霊から守護神へと転化し、和霊信仰が怨霊・

御霊信仰から守護神信仰の系譜に移り変わった傾向が窺われる。

また、歴代藩主の尊崇や和霊の霊験あらたかさなどにより、和霊信仰は次第に一般の庶民の間にまで浸透した。例えば、1748（寛延元）年、袋屋長兵衛勝彦が神馬を奉納し、町内より神馬屋が建てられた。1790（寛政2）年には、裏町の酒造家らによって、楼門、籠所、神供所などが造営された。このように、庶民層を主体とする寄進、奉納が行われ、和霊信仰の庶民層への浸透が見られる。時代の経過にともない、山家の怨霊は次第に風化され、その多様な霊験で人々に信仰されていた。やがて、五穀豊穰・漁事繁栄の霊験あらたかな神として信仰されるようになってきた。

その後、和霊の信仰圏は宇和島を超えて、延享・宝暦年間にその信仰圏は四国・九州・中国地方一円に拡大した。1758（宝暦8）年に書かれた『和霊明神由緒』（宇和島和霊神社本社所蔵）に「今ノ山家モ和霊明神ト崇祀テヨリ、宇和嶋郡中ノ守護神トナリ、道理成事ナレハ祈願シルシ速成ルニヨツテ四國西國中國九州ヨリモ歩ヲ運ヒ、神徳ヲ仰者年々歳々ニ弥増セリ、遙東國ヨリ参詣スル者尤多シ」とある。また『記録書抜・伊達家御歴代事記 2』によると、1750（寛延2）年、和霊祭に際して、諸国から四百六十艘の船が入港し、二千人ほどの旅人が訪れた。1758（宝暦8）年、和霊神事において、「和霊神事他所参詣且入船申出ル。向新町宿付候、大洲、松山、讃州、土州、参詣式百七十六人、商人十五人。新町口見及候分、土州七百五十人程、大洲二百人程、松山六十人程、佐伯町口見及候分、土州六十二人入船高三百三十五艘」であった。このように、和霊信仰は幅広く広がっていった。和霊信仰の展開にともない、神社勧請などの形で各地において和霊神社が創建されるようになった。なお現在になっても、和霊が四国・中国・九州一円においては、漁業・農業・産業の神として深く信仰されている。西日本各地に清兵衛をまつる和霊社が数多く見られる。

4 現代の和霊神社と和霊大祭

宇和島市和霊町に鎮座している和霊神社は和霊信仰の総本山である。1945（昭和20）年にはその社殿は大空襲により灰燼に帰したが、戦後の1957（昭和32）年に現状のように再建された。和霊神社の由緒によると、和霊は漁業を中心に産業の神として広く崇められている。その御利益には、大漁祈願・五穀豊穰・商売繁昌などがある。特に海上関係、漁業関係者の信仰が厚く、地元では「和霊さま」の愛称で親しまれているという。

和霊神社が再建された年から、和霊大祭は毎年宇和島牛鬼まつりと同時に行われるようになった。頼山陽著『日本外史』によると、豊臣秀吉が加藤清正に朝鮮出兵を命じた文禄の役（1592年・文禄元年）に武将加藤清正が韓国の慶尚道・晋州にある、晋州城を攻めるときに、亀甲車を造って城の上から射おろす矢や、投げつける石を防いだのが始まりと言われている。亀甲車とは、堅板で箱の形を作り、それを牛革で包んで、牛の生首を棒に刺しその先に掲げ、中に兵士が入って攻め戦ったものと言われている。文禄2年晋州城を攻めた時清正は亀甲車を造り、その車に兵士を乗せて、城の下にせまり城の根元に穴を掘った。すると、城の高殿や物見やぐら



図1 宇和島和霊神社の地図
(googleより 筆者作図)



写真1 宇和島和霊神社本社
(2018年2月10日 筆者撮影)

が崩れ落ちた。清正は、黒田長政とともに城に攻め入り、城の守将と激しく交戦し城を陥落した。この武勇伝を、藤堂高虎が宇和島に伝えたと言われている。その後、1840(天保11)年頃に、宮の下村(現北宇和郡三間町)または、成妙村の庄屋備忘録に牛鬼のことが触れられていた。この朝鮮出兵の際に使われた亀甲車の話が、宇和島やその周辺に、牛鬼というものが出来た起源であろうといわれている。

現在の和霊大祭・うわじま牛鬼まつりは毎年の7月22日から24日にかけて開催されている。和霊大祭は主に7月23日と24日の二日間に行われる。23日の10時から和霊神社の境内において例大祭が執行され、宇和島市内の政財界、各種団体の長が参詣し、神事が行われる。また、大漁祈願や新造船の安全祈願も行われ、一般参詣者や宇和島市周辺の漁民が参詣している。『愛媛県史』によれば、昔の和霊大祭には、大漁を祈願する漁民が西日本各地から参詣にくるという記録もみられる。和霊神社の宮司さんの話によると、現在、夜の19時から22時まで宵宮祭が行われ、神事への参加者は神主10人程、地元有力者3人、総代10数人、一般参詣者7人(5人は漁業関係者)であるという。神事のほか、浦安の舞などの余興も奉納される。20時頃神事が終わった後、一般参詣者が次々参拝に訪れている。24日には、13時から、稚児行列が街頭に出発し、子供神輿が渡御する。17時から神輿(3体：前神輿、中神輿、後神輿)渡御の神事が執行され、17:30頃に和霊神社を出て、御幸橋を通り、和霊公園を抜け、国道56号を東に進み、和霊東町と伊吹町の境まで行っている。途中、御旅所となる丸ノ内和霊神社では神事が行われる。この御旅所となる丸ノ内和霊神社は、山家清兵衛の邸宅跡であり、一家が殺害された場所である。この場所は、江戸時代は藩の倉庫として使用されていたが、明治初年に丸之内和霊神社の小祠が設けられるようになった。1898(明治31)年に伊達家が敷地を寄進し、1908(明治41)年に宇和島城内の日吉神社の本殿を移築し現在にいたるといふ。夜の8時ごろに神輿が新内港に到着し、海上渡御が行われる。最終日の走り込みは祭のフィナーレを飾る最大の見物である。走り込みでは三体の神輿が登場し、普通の神輿のように人が担いで道を練り歩くのではなく、「海上渡御」といって召船で海

上奉送され、須賀川を登り、最後には川面に立てられた神竹の周りに三体の神輿が集まり、若者たちが神竹に登ってつべんに結ばれた紙幣を奪い合う。和霊大祭は神輿の「海上渡御」や勇壮な「走り込み」で知られ、昔から南予各地から参詣者が多く訪れている。ここで、神輿を船に乗せて海上を渡御することには、海上安全・漁業繁栄への希求が含まれると推定できる。

表3 和霊大祭・うわじま牛鬼まつりの行事表
(2018年第52回和霊大祭・うわじま牛鬼まつりの行事表を参照し、筆者作表)

行事名	時間	会場
牛鬼煙火打上(昼玉)	13:30~(7月22日)	浄念寺裏山
牛鬼うわじまガイヤカーニバル(子供の部)	14:00~(7月22日)	きさいやロード・牛鬼すとりと
牛鬼第23回オールカマーフェスタ	16:00~21:00(7月22日)	中央町ふれあい広場
牛鬼煙火打上(昼玉)	16:30~(7月22日)	浄念寺裏山
牛鬼うわじまガイヤカーニバル(一般の部)	16:30~(7月22日)	きさいやロード・牛鬼すとりと
牛鬼県警音楽隊ふれあいコンサート	10:00~10:30(7月23日)	南予文化会館大ホール
和霊]例祭	10:00~(7月23日)	和霊神社
牛鬼ブラスバンド・トランペット鼓隊・県警音楽隊パレード	10:45~12:30(7月23日)	きさいやロード~フジ宇和島店
牛鬼煙火打上(昼玉)	12:00~20:0030分間隔にて打ち上げ(7月23日)	浄念寺裏山
牛鬼子ども牛鬼パレード	13:20~16:00頃(7月23日)	牛鬼すとりと~須賀川
牛鬼第23回オールカマーフェスタ	16:00~21:00(7月23日)	中央町ふれあい広場
牛鬼宇和島おどり大会	17:00~20:30頃(7月23日)	きさいやロード
和霊宵宮祭	19:00~(7月23日)	和霊神社
牛鬼海上打ち上げ花火	20:30~21:10(7月23日)	宇和島湾内
牛鬼闘牛大会	12:00~15:00(7月24日)	市営闘牛場(有料)
牛鬼親牛鬼パレード	12:50~16:30頃(7月24日)	牛鬼すとりと~須賀川
和霊子ども行列	13:00~15:00(7月24日)	和霊神社~街頭
牛鬼煙火打上(昼玉)	15:00~20:30(7月24日)	浄念寺裏山
和霊神輿渡御発輿式	17:30~(7月24日)	和霊神社
和霊御旅所祭	19:00~(7月24日)	丸之内和霊神社
和霊海上渡御	20:15~21:00	新内港~樺崎
牛鬼打ち上げ花火	20:40~(7月24日)	丸山公園運動広場
和霊走り込み	20:50頃(7月24日)	須賀川

5 仙台(旧仙台藩)における和霊信仰

5-1 仙台における和霊神社の創建

山家清兵衛はもともと仙台藩主伊達政宗の家臣である。仙台の山家氏は当時仙台藩に残り、山家騒動の難を逃れた清兵衛の長男・喜兵衛の子孫であるという。『愛媛県史 学問・宗教』によると、現在、全国には159社(表4、参照)の和霊神社もある。それらはほとんど九州、四国辺りに分布している。東北地方では、山家清兵衛とゆかりのある仙台(宮城県)には2社しかない。

表4 全国における和霊神社の分布（『愛媛県史 学問・宗教』より、筆者作表）

府・県	分霊社数
愛媛	82社
香川	16社
徳島	9社
高知	14社
広島	5社
岡山	26社
兵庫	1社
鳥根	2社
山口	1社
大阪	1社
宮城	2社
合計	159社

和霊信仰は主に四国、九州、中国地方一円に分布しているが、本節は山家とゆかりのある仙台における和霊信仰を事例に、伝播地における和霊信仰の展開について分析を行なっていく。仙台における和霊信仰の成立と発展は二つの和霊神社と深く関わっている。まず、江戸末期、十代山家豊三郎は東一番丁の邸内（国分町二五番丁地）に一社を建て、公頼が其の女に与えた書簡を以て神体に祀ったのが即ち仙台の和霊神社である。公頼が殺されたの6月29日（旧暦）で、毎年8月9日（太陽暦）に祭典が行われていた。『東一番丁物語』によれば、明治維新前には山家氏の邸内に山家明神と言う小祠を祀ってあった。これは山家氏の祖先が、山家清兵衛を祀った宇和島の県社、山頼和霊神社を分霊したものである。この山家豊三郎【1832（天保3）年～1896（明治29）年】は、家禄520石の仙台藩士であり、少年時代に祖父市十郎から外記流の砲術を学び、1857（安政4）年には大砲頭として蝦夷地警備に当たった。明治維新以降は公益家として知られ、当時の東一番丁を中心とした繁華街形成の基礎作りを行った人物である。その経緯について東一番丁は元来武士の住宅屋敷であり、仙台の要衝の地であった国分町、芭蕉の辻、大町4丁目、5丁目に近隣していた。山家豊三郎は、この一番丁をいかに開発し、また職を失った士族にいかなる生活を与えようかと苦心して、東京、京都、大阪などへの視察ののちに、当地を商店街として発展させるべく尽力した。手始めとして、玉沢横町に面した自らの屋敷を分割して小店舗十数戸を建築し、商売を希望するものに貸与した。また、彼の隨身には煙草屋を開業させ、多くの商店の経営指導も行い、出店を奨励した。そのゆえ、玉沢横丁は山家横丁とも呼ばれていた。さらに、山家豊三郎は邸内に祀っていた山家明神（和霊神社）を一般に開放して参詣の便をはかり、同社の祭礼を賑やかに催したことにより、付近には寄席、浴場、劇場、芸置屋などが開業し、繁華街としての形成が備わったとされている。この祭礼は戦争の中断を経て、1952（昭和27）年、七年振り再開催された。仙台の和霊明神（俗に山家明神）は1883（明治16）年8月、同家が東二番丁立町通り角に移った時、同時に同邸に遷座された。さらに、1945（昭和20）年の仙台空襲で焼却された以来再興に至らなかった。1974（昭和49）年に山家邸が青葉区台原に移転し、邸内の和霊神社も山家氏の移転とともに台原に移された。現在の山家家14代目の山家守雄の話によれば、元々その邸内にあった和霊神社を一番丁に移りたかったが、一番丁の地価が高いためあきらめた

という。和霊神社が台原に移されてから、同じく毎年の8月9日には祭典が行われている。また、三年後に東一番丁ジャスコの屋上に分霊を祀るようになった。ジャスコ東一番丁は1975（昭和50）年に開店し、1984（昭和59）年には新たにフォーラス仙台店となり、その屋上に和霊神社が鎮座している。当時、和霊神社をビルの屋上まで分霊された背景については、当時の80年代の全国における祭りのブーム、一番丁を振興しようとした意図やビルの鎮守などがあると山家氏が語った。

5-2 仙台にある和霊神社の祭礼

5-2-1 フォーラス屋上にある和霊神社の祭礼と一番町三社まつり

元々東一番丁の山家氏邸内にあった和霊神社の祭礼としては、『東一番丁物語』の記録によれば、和霊明神の祭礼は旧六月三十日に営まれていたという。現在のフォーラス屋上にある和霊神社の祭礼は仙台一番町三社祭りの一部である。近代においては、和霊神社や野中神社にはそれぞれのまつりもあった。『仙台市史 近代2』の記録によると、大正の仙台における年中行事としては、7月24日には東一番丁の野中神社祭があり、8月9日には東二番丁の和霊神社祭があったという。1980年代から、サンモール一番町商店街にある野中神社、おおまち商店街・藤崎百貨店屋上にある藤崎えびす神社、一番町商店街・フォーラスビル屋上に鎮座している和霊神社の三社合同の祭礼、いわゆる一番町三社まつりが毎年行われるようになった。基本としては、毎年の7月の第三の土曜日と日曜日に行われるが、実際には日付がずれた場合もある。それぞれの神社の管理やまつりの執行としては、野中神社がサンモール一番町商店街振興組合、藤崎えびす神社がおおまち商店街振興組合、和霊神社が一番町商店街振興組合が担当している。この「三社」のほかの二社については、まず野中神社は1601（慶長6）年、伊達政宗が仙台の町割りを実施した際に使用した「縄」がこの地に埋められ、その上に建てられた。「縄」にちなんで、「縁結び」や「商売繁盛」などのご利益がある。もう一社のえびす神社については、1819（文政2）年に藤崎がもともと「得可壽屋」の屋号で呉服屋を始めた時に、商売繁盛の神様ということで、その敷地内に祀ったのがその始まりであった。総本社は兵庫県西宮市にある「西宮神社」で、ご利益は「商売繁盛」である。

現在の仙台一番町三社まつりの一部としてのフォーラス・和霊神社の祭礼は、神事と神輿渡御及び一部の余興によって構成されている。筆者は2017年7月22日、23日に開催した第38回一番町三社まつりを事例にフォーラス屋上にある和霊神社の祭礼に考察を行った。まず、7月22日（土）の宵祭には、午前11時からフォーラス屋上の和霊神社において、桜岡大神宮の神職により修祓、降神式や祝詞奏上などの神事が執行された。山家家14代目の山家守雄氏が祭主として、一番町商店街振興組合の理事長をはじめとする関係者など13名程が祭礼に参列した。その後、フォーラスの一階においては、和霊神社神輿の修祓式が行われた。22日の宵祭りでは、各町内でイベントが行われ、23日の本祭りでは、三社から神輿が出され、一番町スクエアから一番町三越方面、そこから折り返してサンモールから中央通り名掛丁方面、そして折り返して一番町までを神輿渡御が行われた。



写真2 フォーラス・和霊神社の例祭
(2017年7月22日 筆者撮影)



写真3 仙台一番町三社まつりの神輿渡御
(2017年7月23日 筆者撮影)

5-2-2 台原にある和霊神社の祭礼

1973（昭和48）年に、元々立町通りにあった和霊神社が山家氏邸と共に台原に遷されてからも、毎年の8月9日に例祭を行う伝統が受け継がれている。特に、十年ぐらい前から、県内県外（近隣の県、山形等）のほかの山家家子孫から毎年の例祭に参加したいという願望が出された。それ以来、県内県外十数名程の山家家子孫が毎年の例祭に参列するようになってきた。2017年8月9日に行われた例祭としては、午前11時から始まり、東照宮の神職（1名）が神事の部分を執行し、14代目の山家守雄氏が祭主として、一番町一番街商店街振興組合代表2名と県内県外の山家家子孫8名ぐらいが参列した。2017年の例祭はちょうど台風の時期にあたったので例年より簡素に行われ、参加者も例年より少なかった。この台原の和霊神社における例祭の起源としては、近世、近代の山家邸内にあった山家明神の祭礼であった。近世末から近代にかけて、10代目の山家豊三郎を中心に山家氏邸内において和霊祭礼が行われたことが想定できる。明治維新以降、和霊祭礼は東一番丁の開発にとともに一般の人々に開放された。現代の和霊祭礼については、山家氏の話によると、この祭礼を通して神に守護されるのが目的であるという。参加に来る一番町振興組合の方は、「いつも一番町を守ってくださる神様に感謝し、これからも守っていただけるように」と話している。

仙台における和霊神社の成立と変遷からみれば、最初は小祠の形で祖先の霊を慰める目的が想定できるだろう。明治に入ってから、十代山家豊三郎は東一番丁を開発した際に、和霊神社を一般の人に開放し、神社の祭礼を賑やかに行った。これは商店街の発展に大いに役立った。ここで、和霊が産業の神として商売繁盛に靈験があることは意識されていただろう。特に、80年代に一番丁を振興しようとした中で、ショッピングモールの屋上に和霊神社を建立したことに
三三
関して、まさに、和霊の「商売繁盛」のご利益が期待されていたと言える。さらに、一番町三社まつりを構成した野中神社、えびす神社、和霊神社はいずれも「商売繁盛」のご利益があることから、三社合同の祭りを通して「商売繁盛」を希求することが含まれると読み取れ



写真4 仙台台原にある和霊神社
(2017年8月9日 筆者撮影)



写真5 台原・和霊神社の例祭
(2017年8月9日 筆者撮影)

る。山家家とゆかりのある旧仙台藩では、山家家の子孫を中心に、地域の商店街振興組合の推進とともに、和霊信仰は発展を遂げた。特に、和霊信仰が仙台に伝わってきたのは和霊が漁業の神、産業の神として定着した後のことで、その展開は主に「商売繁盛」のご利益のもとで行われてきた。

終わりに

本稿では、菅原道真の神格化をみながら、和霊信仰を事例に、中世から近世にわたって流行った怨霊の神格化を考察した。菅原道真の場合、彼は冤罪で左遷されて怨みを持ったまま死んだ。その死後、疫病や洪水など、一連の天変地異が起こった。これらはすべて「道真の祟り」と噂された。道真の祟り、怨霊を鎮めるため、朝廷から贈位や祭祀などが行われ、さらに道真の霊を祀る社祠も建立された。時代の経過につれて、道真の祟りや怨霊の記憶が次第に忘却された。怨霊が鎮まるにともない、菅原道真の学者としての側面が強調されるようになり、学問の神様として信仰されるようになってきた。

和霊信仰の場合、山家清兵衛の神格化は菅原道真の天神化と酷似している。山家清兵衛は宇和島藩主伊達秀宗の下で、産業の拡充、民政の安定に手腕を発揮していたが、政敵に暗殺された。その後暗殺事件に関与した者が相次いで海難や落雷で変死したため、人々は清兵衛の怨霊だと恐れ、その祟りを鎮めるために、彼の霊を城北の地に祀り、彼を神として祀り上げた。このように、和霊信仰が御霊信仰として成立したのである。その後、歴代藩主の保護と尊崇により、和霊信仰も大いに発展した。特に「大明神」号が授けられてから、災害などの異変がほぼなくなった。それにともない、和霊の性格も変化し、その信仰圏も拡大した。やがて、和霊は五穀豊穰・漁事繁栄の霊験あらたかな神として信仰されるようになった。このように、清兵衛の怨霊を祭祀し、祭礼をくりかえした結果、その怨霊は荒ぶる霊からやがて平和な恵みをもたらす守護神すなわち和霊に変化し、霊験あらたかな神となった。

和霊信仰が仙台に伝わってきたのは、和霊が漁業の神、産業の神として定着した後のことである。和霊信仰が仙台における展開は主に「商売繁盛」のご利益のもとで行われてきた。すなわち、現代の宇和島においても、仙台においても和霊は「五穀豊穰」や「漁事繁榮」、「商売繁盛」などの霊験があることで、人々に信仰されている。

上記、菅原道真と山家清兵衛の事例からみれば、神格化のはじまりは、崇り・怨霊への恐怖から発生した。時代の経過にともない、その怨霊が鎮まった後、霊験あらたかな神として現世利益をもたらすことによって信仰が維持されていることがわかった。祭祀をくりかえしたことで、当該人物の怨霊は、災害を及ぼす荒ぶる霊からやがて御利益を授ける霊験あらたかな神へと変化した。神格化を維持・支えるものには、崇りから現世利益への転換が不可欠であると考えられる。

参考・引用文献

- 伊予史談会、1987、『予陽郡郷俚諺集』（1711）、伊予史談会
愛媛県史編さん委員会、1985、『愛媛県史 学問・宗教』、愛媛県
愛媛県史編さん委員会、1986、『愛媛県史 近世上』、愛媛県
大石昌、1990、『藤崎 170年の歩み』、株式会社藤崎
近代史文庫宇和島研究会、1982、『記録書抜・伊達家御歴代事記2』、近代史文庫宇和島研究会
黒板勝美編輯、1929、『日本紀略』前篇（成立年代不詳）、國史大系刊行會
作並清亮、1915『東藩史稿』卷之6、渡邊弘
柴田量平、1944、『東一番丁物語』、珊瑚
鈴木讓、1936、『和霊神社祭神事績』、出版者不明
仙台市史編さん委員会、2009、『仙台市史 通史編7』近代2、仙台市
伊達家家記編輯所、1914、『鶴鳴餘韻』伊達家家記編輯所
平重道、1973、『伊達治家記録 三』、宝文堂
宮田登、1964、「民衆宗教創出の信仰的基盤」、東京教育大学昭史会編『日本歴史論究：遺物
遺習資料と歴史研究昭史会三十周年記念論文集』、文雅堂銀行研究社
山田雄司、2007、『跋扈する怨霊一崇りと鎮魂の日本史』、吉川弘文館
山田雄司、2014、『怨霊とは何か-菅原道真・平将門・崇徳院』、中公新書
柳田國男、1962、「人を神に祀る習俗」（1926）『定本柳田國男集』第十卷、筑摩書房
柳田國男、1984、「御霊信仰」、民俗学研究所、『民俗学辞典』、東京堂出版
頼山陽(著)、頼成一・頼惟勤(翻訳)、1976、『日本外史』（1826）、岩波書店

インターネット資料

- 多治比奇子編輯、2014、『北野縁起』、電子ブック、東北大学図書館所蔵
『台徳院殿〔徳川秀忠〕御実紀』、国立国会図書館デジタルコレクション
『和漢三才図会』、国立国会図書館デジタルコレクション